

がん検診行動に関連する性格と心理社会的要因の検討

○菊池紗利那・嘉瀬貴祥

(人間環境大学総合心理学部総合心理学科)

研究の目的

がんは日本人の死因第1位であり、生涯罹患リスクは男女とも約50%に達する(国立がん研究センター, 2023)。国の「がん対策推進基本計画」では、科学的根拠に基づく検診受診率を60%以上に引き上げる目標が掲げられているが、現状は約40~45%にとどまっている。受診率向上には医療体制の整備だけでなく、個人の心理的要因を踏まえた理解が不可欠である。近年、性格特性と健康行動の関連が注目され、特にBig Fiveの誠実性は受診行動と正の関連を示すことが報告されている(Hajek et al., 2021)。しかし、これらの知見の多くは欧米文化圏に基づいており、日本における先行研究としては、特定のがん種を対象としたものが少数ながら存在するが、Big Five性格特性に基づく検討は限られている。

本研究では、日本在住の成人を対象に、がん検診の受診意図および知識と、基本属性、Big Five性格特性、認知欲求、Sense of Coherence (SOC)などの心理的要因との関連を検討する。

方法

調査は2025年10月に、アイブリッジ株式会社が提供するウェブ調査サービスであるFreeasyを利用して、日本全国に在住する満20歳から79歳の男女480名(うち女性240名、平均年齢49.86歳、 $SD=16.59$)に調査を行った(承認番号:2025D-006)。参加者のうち、特定の選択肢を選ぶように教示した項目に正しく回答し、分析に必要な項目にすべて回答した376名(うち女性195名、平均年齢51.73歳、 $SD=16.13$)を分析対象とした。

調査内容は、(1)基本属性:年齢、性別、学歴、職業、既往歴、がん罹患経験など、(2)がん検診に関する情報:知識、受診歴、受診意図、健康情報への接触傾向など、(3)心理的要因:Big Five性格特性(並川他, 2012)、認知欲求尺度(神山・藤原, 1991)、SOC-L9(Kase & Endo, 2020)、行動理論に基づく項目で構成された。

分析には統計解析ソフトHAD 18.010(清水, 2016)を用い、記述統計、相関分析、重回帰分析を行った。

結果

変数間の相関関係を確認するため、相関分析を行った。行動意図は、認知欲求、SOC、外向性、勤勉性、開放性、協調性、行動態度、主観的規範、知覚された行動制御、知識との間に有意な正の相関($r=.18$ to $.71$, $ps<.01$)を示していた。一方で、神経症傾向は有意でなかった($r=-.06$, ns)。

年齢、性別、結婚、職業、職種、病歴、家族と知人の病歴、がん検診の経験、人間ドッグの経験、定期的な健康診断、認知欲求、SOC、外向性、勤勉性、神経症傾向、開放性、協調性を説明変数、行動態度、主観的規範、知覚された行動制御、行動意図、知識を目的変数として重回帰分析を行った。主な結果として、行動意図に対して、がん検診の経験($\beta=.44$, $p<.01$)、定期的な健康診断($\beta=.14$, $p<.01$)、SOC($\beta=.26$, $p<.01$)、外向性($\beta=.18$, $p<.01$)、神経症傾向($\beta=.31$, $p<.01$)から有意な正の関連性が示された($R^2=.31$, $p<.01$)。また、知識に対して、年齢($\beta=.26$, $p<.01$)、家族の病歴($\beta=.14$, $p<.05$)、がん検診の経験($\beta=.16$, $p<.05$)から有意な正の関連性が示され($R^2=.18$, $p<.01$)、病歴($\beta=-.12$, $p<.05$)から有意な負の関連性が示された。

なお、説明変数間における多重共線性は認められなかった($VIF=1.19-2.73$)。

考察

本研究では、がん検診の受診意図および知識と、基本属性、Big Five性格特性、認知欲求、SOCなどの心理的要因との関連を検討することを目的とした。その結果、SOCや外向性が高くなるほど、がん検診行動意図が高い傾向がみられた。一方で、神経症傾向は単純な関連では明確な関係がみられなかったが、他の要因を考慮すると、神経症傾向が高くなるほど、検診への関心が高まる可能性が示された。また、過去にがん検診を受けた経験がある人ほど、今後も受けようとする意図が高く、経験が意識の形成に影響していると考えられる。

SOCなどの心理的要因に働きかけることで、がん検診の受診意図を高めることができるかもしれないと考えられる。